

私の目指す弁理士像

No. 71

会員 根岸 武志

弁理士登録が昨日のように思える今日この頃であるが、既に弁理士登録から4ヶ月が経過しようとしている。しかし、私は、未だに自分の目指すべき弁理士像を明確に映し出すことができず、平平凡凡と過ごしている。今回、「私の目指す弁理士像」の執筆依頼を受けて、自分を見つめ直すいい機会をいただいたと思い、自分の目指す弁理士像について、紙上に記してみたい。

1. 専門分野

まず、初めに、自分の専門分野に関連して、「私の目指す弁理士像」に言及したい。

私の大学・大学院時代の専攻は有機化学であるが、通常の実験ばかりでなく、エタノールの人体実験も頻繁に行うような学生であったため、自分が化学の専門家であるなどとは到底言えないし、化学関係のみの特許業務で、今後飯を食っていこうなどという考えは毛頭ない。

しかし、自分が人生の糧として特許業界を選んだ大きな理由は、化学が好きだったからであり、今後自分の能力を高めて行く意味においても、より一層化学関連の知識を深めて、化学分野に明るい弁理士の一人として活動していきたいと思う。

また、化学分野ばかりでなく、「〇〇分野に根岸あり」というような、専門分野を1つでいいから、今後作っていきたくて考えている。現代の技術分野の高度化において、1つの専門分野を自分のものにするには、並大抵ではないことを重々承知しているが、この業界に身を投じたからには、その分野に関しては、後塵を拝せず、他の人からフロントランナーとして認められるような存在に、私はなりたくて考えている。

2. クライアント

次に、クライアントとの関係で、「私の目指す弁理士像」について述べたい。

実務未経験で弁理士を目指していた頃は、「とにかく知的財産の仕事がしたい」の一心で勉強に励んでいた。

しかし、弁理士となって、発明者（又は特許担当者）と面談をするようになり、この仕事の責任の重大さをひしひしとを感じるようになった。当然ではあるが、弁理士の仕事如何で、彼らの血と汗の結晶が無になってしまうからである。

江戸時代を例にして例えると、「武士」というサムライは、自分の命を賭けて、藩主に忠誠を尽くして生きていた。私も現代の「サムライ」となった以上、「クライアント」という藩主に忠誠を尽くすつもりで生きていくつもりである。しかし、腰巾着の「家老」になるのではなく、クライアントに言葉を返すようであっても、クライアントに忠言できるような「名家老」を目指したいと思う。それこそが、自分とクライアントをともに成長させ、相互繁栄をもたらす近道であると考えからである。

3. 最後に

最後に、私の人生の目的と関連して、「私の目指す弁理士像」を述べたい。

私の尊敬する人物の一人に、現在イタリアで活躍しているサッカー選手の中田選手がいる。今でこそ、日本代表のエースとして君臨する彼ではあるが、彼のプロの新人時代を知っている誰もが、ここまでの人物になるとは夢にも思わなかったに違いない。

彼をここまで成長させたもの、それは、長所を伸ばしつつ、短所を克服してきた、彼の尋常ならぬ努力の賜物であることは、明らかである。

では、彼をそこまで努力させたものは何か。ある雑誌のインタビュー中に、その答えらしきものを見た私は、非常に感銘したことを今でも忘れない。彼は、「サッカーを通して、自己の可能性を高めて行きたい。」と、そのインタビューの中で言っていた。つまり、彼は、サッカーを通して、自分の人生を高めて行くという目的のために、努力を惜しまなかったのだ。

中田選手のような努力を、私は到底することはできないと思う。しかし、彼の発言を私の立場に置き換えた、「弁理士業務を通じて、自己の可能性を高めていく。」これこそが、私の目指すべき真の弁理士像であり、私の今後の人生観である。